

御神渡り

信州諏訪湖には『御神渡り おみわたり』という諏訪の七不思議のひとつがある。冬の厳しい寒さで全面結氷した湖面にできた割れ目沿いに、鋭くせり上がった氷列がジグザグに走るもので、諏訪大社の上社の男神が下社の女神のもとに通った跡との言い伝えがある。御神渡りの造形の妙は自然から啓示として豊凶を占う神事となり、室町の世から五百年余の記録が残されている。

一七八三年の浅間山大噴火に続く天明の大飢饉の時には、翌年の十二月十二日に過去五百年で一番目に早い記録の御神渡りが認められ、当時の寒さがいかにすさまじかったが記されている。ナポレオンが冬將軍に敗れた一八二年は小氷期と呼ばれている寒冷な時代であったが、御神渡りの記録にも十二月末から一月初めの記録が続き日本でも厳しい冬となっていた。

逆に世界的に温暖な気候となった十六世紀初頭には、湖面が全面結氷しない『明け海』と呼ばれる年が八年も続いた。室町から明治までで最も暖かい冬の気候となったのが戦国の世の始

まりとなったのも皮肉である。

五百年余の間、年輪のごとく刻み込まれた記録は世界を見わたしても極めて貴重なものとなっている。この信州の御神渡りの記録が遠く一万キロ離れた南米ペルーの四百年余の記録を突合せてエルニニョで結ばれていることがわかってきた。

エルニニョはペルー沖に広がる海面の温度が異常に高くなる現象で、大気の流れ地球規模が変わりペルーでは大雨となる。日本では暖冬となり易く諏訪湖の御神渡りが遅れる。信州の冬の風物詩『御神渡り』という神社の占い事が、スペイン語で神の子と呼ばれているエルニニョの絆きつなで南米ペルーと結びつく。何か因縁めいた妙な組合せである。